

赤根 さち子

学校名：横浜市立川和東小学校 担当教科：2年担任

1. 今回のウガンダ研修における目的やねらい

国際理解教育、異文化理解の大切さが叫ばれている中で、私なりに国際理解教育に取り組もうとしてきた。しかし「世界がもし百人の村だったら」を読んでも、「かわいそうな人がいるな」という認識に終わってしまい、子どもたちが自分自身の問題として考えることはとても難しいと感じていた。また、教える教師自身が本やテレビで見た知識しか持っていない。伝えるべき現状を本当に知っているかということも疑問である。この研修を通じて、本やテレビなどでは得られない、生の体験を子どもたちに伝えたい、開発途上国の現状や、現場で尽力されている青年海外協力隊、NGOの方々の姿に触れ、学んだことを子どもたちに伝え、国際感覚をもった子どもの力を育てたいと思った。

渡航前に、第一回目の授業として、ウガンダについて簡単な紹介を行い、もっと知りたいことは何かを尋ねたところ、「どんなお金を使っているのかな」「どんな字を書くのかな」「学校の様子はどうか」「どんな動物や、鳥がいるのかな」「どんな食べ物があるのかな」など素朴な疑問を持った様子だった。「実際に行って、調べてくるね」と言うと、とても興味を持ち、楽しみにしていた。

交流プログラム・交流授業の機会も多く頂き、これも今回の大きな目的であった。ウガンダの子どもたちに日本文化を紹介することで、クラスの子どもたちと歌を通じた心の交流を行い、互いのことを身近に感じられるようにし、実践授業につなげたいと思った。

2. 目的やねらいの達成度

滞在中は、常に今回の研修のねらいを頭に置き、この経験をどのように帰国後の授業実践に活かそうかと考えていた。授業のための材料は十分に得られたと思う。事前授業で、子どもたちに尋ねた「ウガンダについて知りたい事」の答えも概ね得ることができた。期待した以上にたくさんの現場を見て回って、ウガンダの様々な場所で活躍されている協力隊の方々の声を聞くことができた。どのくらい自分が理解できたか、その理解が正しいのかどうか、判断する事は難しいが、11日間の滞在中で、精一杯の情報を集め、持って帰れるように努力したことは確かに言える。

小学校への訪問では、沖縄の歌遊びを紹介し、一緒に歌い、踊ることができた。子どもたちも楽しんでくれた様子で、何よりそれが成果と感じられた。更に、子どもたちが見せてくれた歓迎の歌や踊りは、まさに音楽を通した心の交流が行えた実感した。

3. ウガンダから学んだこと

赤道直下ということで、きっと暑いのだろうと思い込んでいたが、気候が涼しく過ごしやすいくことがまず驚きだった。開発途上国といえば飢えと結び付けていたので、ウガンダには食料が豊富であるということも新しい認識だった。

また、ウガンダの抱える困難や問題についても知ることができた。エイズによって孤児になる子ども、学力の問題、環境保護と開発をどう両立させるかなど、すぐには解決のできない問題について考えさせられた。しかし、そんな中でも生き生きと生活している人々、学んでいる子どもたちの姿が印象的だった。

交流プログラムの中で、学校の子どもたちや先生方から頂いた温かい歓迎から、協力隊として活動されている先生方が、どれほど尽力されているかを垣間見る事ができたように思う。ウガンダの学校で、先生方が子どもたちや地域の人々に認められていること、その成果があるからこそ、訪問した私たちが暖かく受け入れられ、楽しい交流が行えたのだと感じた。